

生きる目的

“人はパンのみにて生きるにあらず（マタイ福音書第4章）”

これまでの節で、人間（ヒト）は、自然、生物、動物、と階層的に、それらの部分集合であること理解してきました。ここでは、人間（ヒト）の生きる目的について考えてみましょう。生きる目的は、有史以来の永遠のテーマでありつづけていますが、人間が自然の部分集合であることまで遡れると、答えは自明となります。目的は無い、のです。人生というのは、星や岩や炭素原子と同じように、ただそこに存在するというだけのことであって、意味というものは持ち合わせていないのです（ジャレド・ダイヤモンド^[1]）。森の文明を有するアジアモンスーン圏は別としても、生物の中で人間だけを特別視する人間中心主義的な思想を根付かせてきた欧米で、この当たり前の事実が今日のように広く受け入れられまでに、なんと多くの知的犠牲や知的忍耐を要したことでありましょか。地球は回っていると言って断罪されたガリレオから始まり、進化論を唱えたダーウイン、神は死んだと宣言して発狂してしまったニーチェに至るまで、枚挙にいとまがありません。世界の哲学・思想に大きな影響を与えている歴史学者ハレルは、「人間およびその自由意思は、化学反応・電気信号である」と結論付けています。生物学、医学の最先端知見は、いずれもこのシンプルな説を、仮説や信仰ではなく、科学的事実として支持しているのです。

自然の一部である生物にも生きる目的はありませんが、あえて、生物自身の定義から目的をこじつけるとすれば、自己再生（リモデリング）が生きる目的となるでしょう。水・大気・土壌に漂う一見下等と思われている細菌などは、進化の先発隊で、リモデリングに必要とされる材料もシンプル・豊富で、自然のいたるところに広く存在しています。自己複製も細胞分裂というシンプルな手法で、不死であることを考えると、遺伝子の継承という点では、極めて堅牢な存在です。動物も、自己再生（リモデリング）が生きる目的、とこじつけることができます。進化の後発組である動物は、生存環境の隙間（ニッチ）を探す必要があるため、自己再生や自己複製の仕組みが特殊化・複雑化されています。エネルギー源となるエサは、各動物によって特化されており、笹の葉しか食べないパンダ、ユーカリの葉しか食べないコアラなど、その偏食ぶりは呆れるばかりです。生物ピラミッドの上部に君臨する肉食獣は、上等というより、個体数・生存域が限定された究極のニッチ生物と考えることもできます。そのエネルギー要求度の高さから、草食動物をエサとせざるを得ません。草食動物は、生物ピラミッドの上部に位置し、個体数も限られるため、その獲得は至難の業です。生物ピラミッドを逆さにすると、自己再生の目的達成の容易さと生存領域の広さ・現存個体数を頂点とする逆ピラミッドが出現します。動物は、自己再生という目的を達成する確率の低い、脆弱な生物なのです。実際、文明に組み入れられた猫の寿命が20歳程度とすると、野良猫や野生のネコ科の平均寿命は数年とかなり短く、天寿を全うできていないのは明白です。野生動物にとっては、毎日がサバイバルゲームなのです。自己複製（子孫の維持）においても、有性生殖によって、その特殊化・複雑化の機会は爆発的に増えましたが、それによって安定的なニッチと、堅牢な生のサイクルが得られているかは、また別問題です。

そうは言うものの、我々人間（ヒト）に生きる目的など無い、あるいは、生きる目的は、自己再生・自己複製（リモデリング）である、と言われて、それで納得する人などいないでしょう。人類が文明を築く以前に、猛獣の餌食になっていた原始時代は、日々のサバイバルゲームを生き残り、子孫を残すことが、生きる目的であったと言っても良いでしょう。目的というのは、100%の達成がほぼ不可能であるか、非常に困難であるからこそ、目的なのであり、それがほぼ無条件で軽々と達成されるようでは、もはや目的ではないのです。現代において一部の紛争域や最貧国を除き、ほぼ無意識・無条件で、リモデリングは達成されていると言えます。そこで、人間（ヒト）には、リモデリングに代わる、新たな生きる目的を見出す必要が生じるのです。サバイバルゲームに心血を注ぐ動物や、有史以前の人間（ヒト）は、狩が終わり、腹

が満たされたら、翌日の空腹と狩りに備え、食べるように休息と睡眠をとったことでしょう。物質的にも、精神的にも、余剰がないその日暮らしは、生きることが目的そのものなのです。文明によって、物質的・時間的余剰を手に入れ、自動的にリモデリングが保証された人間（ヒト）は、どうなったのでしょうか。その余剰時間を何か別の目的に振り向けなければ、退屈で気も狂わんばかりです。何故なら、肥大化した前頭葉（脳）は、欲望の拡大再生産装置であり、何もしないで済みようにはできていないからです。ショーペン・ハウアー^[2]は、凡庸な人間には膨大な余剰時間を使いこなすことが難しく、時間を生かし切るには知性が不可欠であることを指摘しています。バーランド・ラッセル^[3]は、人間の負荷や労役を減らし、時間的余剰を得るために生み出されたはずの多くの技術革新にも関わらず、一向に現代人が暇にならない（それどころかむしろ忙しくなってさえいる）ことを指摘しています。それにしても、卓抜した前頭葉（脳）の働きで、リモデリングを達成した人間（ヒト）が、その前頭葉（脳）の欲望拡大再生産機能のために、余剰時間を持て余し、別の生きる目的設定を執拗に自身に追い求め、自身で苦悶せざるを得ない、というのも皮肉な話です。

というわけで、「人間はパンのみにて生きるにあらず」となり、振り出しに戻ってしまいました。では、何のために生きるのか。膨大な余剰時間を有意義に使う新たな目標設定として、「よりよく」生きるために、生きる。よりよく生きるとは、何か。ここで「幸福」という概念の発明につながっていくのです。幸福の概念的・物理的定義については、「第2章人間分子論」や「第3章理系的幸福論」で詳しく考察しましょう。ところで、「人間はパンのみに生きるにあらず」は、マタイ福音書第4章の有名な一節であり、その後、「神の口から出る1つ1つの言葉による」、と続きます。つまり、リモデリングのためだけに生きていけるわけではなく、信仰（この場合はキリスト教）によって生きるのだ、と言っているわけです。人間分子論は、いわば、宗教や道徳に頼らない幸福論です。本題に入る前に、生きる目的・幸福などの概念に対して、宗教・道徳が果たす役割を明確にしておく必要があります。

参考文献

- [1] 吉成真由美[インタビュー編]、知の逆転、NHK出版新書
- [2] ショーペン・ハウアー、橋本文夫訳、幸福について一人生論、新潮文庫
- [3] バーランド・ラッセル、怠惰への讃歌、堀 秀彦、柿村峻訳、平凡社ライブラリー